

# ■ 原爆体験

◆岩田 絹子(64歳)

## 看護婦だった私の原爆体験

原爆体験 ●

八月六日、真夏の日射の路を分院しに帰院した時、玄関を入ってすぐ「ガラス窓」に青白い走る光線が目映ったとたん、目の前が真暗になり目を開くことが出来ません。土ほこりの中じつと立っていました。そっと目を開くとはるか先方にはほんのりと明りが見えました。我に返って歩こうとした時、一緒にいた友の、「助けて、助けて」と叫ぶ声、見渡せど姿は見えません。くずれ落ちた壁土でもうもうとしていきます。手さぐりで右に左に手を回し探しました。どれくらいの時が流れたのかわかりません。両手に友の手が触れ、力一ぱい引っ張って壁土の下敷きの友を起こしました。看護帽もどこに飛んだのかわかりませんでした。無意識に早く出なければと材木、壁土の上をはだして飛び出しました。

見渡す限り焼野原。一軒の家もなく高々とガレキの山が続いているばかり。不安と恐ろしさで一杯でした。本院の建物が目に映った時嬉しさで我を忘れて泣きました。早くこの場を去らねばとガラスの破片を踏み踏み走り本院にたどり着きました。鉄扉は曲がり、窓柵のみ赤茶色に曲がり見るかげもありません。防火シャッターは途中で止まり、時計はこわれ、行きかう人達は、顔や頭から血を流し、白衣は真っ赤に染ま

っていました。何が起こったのか、誰に何をしても良いのかかりませんでした。動ける者が臨機応変に、看護に当りました。薬は壁土の下に、注射器はこわれ、消毒どころではありません。夕方近く赤十字の参事官の遺体を探しに寝台車を押して紙屋町に急ぎました。

市電は焼けて赤茶色の鉄骨となり、線路上に立っていました。歩道は熱くて歩けなく線路の上を歩きました。あたり一面ビル一つ無く広々とした焼野原です。紙屋町で参事官が水晶の印を持参との事で印を探しました。真黒に焼けた遺体の足元に印を見つけ帰院しました。夜に近く空は晴れ、明るい星が見え始めました。今歩いて来た歩道の土がホコホコと燃えています。遠くでサイレンの音を聞き、ほーっとしていました。我にかえって朝食の後には、何も食べず飲まずでしたが、空腹は感じませんでした。夜になってもトラックで運び込まれる軍人さん、収容する場所も整理出来ていません。院内は足の踏み場も無く散乱していますが、壁土、ガラスは片隅に寄せ、毛布を床に並べて敷き収容しました。一見、どこも異常が無いような方々が、血を吐いて次々に亡くなっていました。手の施しようもありません。顔や手足は煤で真黒

に、歯だけ白く目はギョロギョロ。普通の様相ではありませんが。ただただ手当ての方法がなく、時間のたつのを待っている状態でした。

一般の方達は火傷が多くほとんど見分けることが出来ません。焼けただれた皮膚に「ウジ」が無数に動きピンセットで除こうとすると皮膚の中に入っていきます。私たちは治療よりも、この人達に食べる物、ミルクや水をあげること、精一杯でした。命の在る間に氏名、住所、年齢を聞き、家族の方達が訪ねて来て分かるように必死で書き留めて歩くのも仕事でした。門の外に巻紙で書き出し、亡くなれば線を引き、死体の始末を次々にしなければ、後から後から収容される人たちの処置が出来ないからです。幾日過ぎたか分かりません。市から救援の「オニギリ」が来ましたが匂いが強く食べられませんでした。私達は戦時中のお米はほとんど「カメ」に入れて土中に埋めました。高粱こうりやんと大豆の主食、ペンペン草のオシタシ、宇品川で「シジミ」を取って来てお菜にし、ただただ堪えて来ました。この尊いお米で被爆直後に大勢の患者さん達に、お粥を作る事が出来たのが、私達看護婦一同どんなに喜んだことか。本当に良かったと思っております。しかしせっかく日赤まで痛い苦しい体を引きずって来て一口も口に入れてあげることなく「看護婦さん、看護婦さん、お水ちょうだい」といつて亡くなって行く大人、子供。耐えられない苦しみを朝から夜まで背に受けて働く私たちは幾度泣いたか知れません。本当に生き地獄です。

疲れた体、土の上で横になると遠くでサイレン、苦しさを堪えながらも出るうめき声、人の走る足音、風の向きで流れて来る臭い（火葬の臭い）、高い空の星を眺めて眠る毎日で

した。どこで誰れが勤務についているのか分かりません。頭髪の中は砂や土でガサガサ着替えも無く毎日毎日よく頑張りました。ガラスの破片で声を失った友、片目を失った友、火傷で亡くなった友、日が経つにつれて状況が耳に入り、自分が生きていることが嘘のようでした。片手をつるし、足を引きずりながら患者、医者、看護婦が一体となって必死で働きました。夜昼をわかつずに頑張りました。

九月末、進駐軍が広島に上陸するというので皆交替で帰郷しました。お金が無いので軍患者さんに連れられ宇品からダルマ船に夜明け早く乗り帰りました。戦時中は汽車の切符の制限で買えません。駅（糸崎）の中は韓国の人達が大勢窓口を占拠して大声で騒いでいました。この時、しみじみと敗戦の悲しさを充分に味わいました。今まで頑張ってきたことは何だったのだろう。…と思うと情ない悔しい気持ちで胸が張りさける程苦しかったのです。私達の青春は戦争に始まり、ただただ忍の一字を守って敗戦の悲しみで終わりました。心に残るのは悲しみだけでした。

四十五年の歳月の流れはあまりにも遠い過去になりました。しかし、二度と戦争は起こしてはいけません。戦争は人を変えてしまうことが一番恐ろしい。今でも病に耐え心の苦しみに生きている大勢の被爆者の事を想うと室内で被爆した自分が幸せである事に感謝し、残りの人生を亡くなった人達の分まで一生懸命生きて社会に貢献することを誓って筆を置きます。

最後に皆はピカドンと呼ばれますが、私達一・三キロのところでは光線は見ても音は聞いていません。

◆栗原 廉之（67歳）

## 閃光の恐怖

原爆体験 ●

四十五年前四月、私は日本最後の海軍軍医学校となった、広島県賀茂郡（黒瀬町）の賀茂海軍衛生学校の一学生であった。黒瀬川の清流にそい、近くには銘酒賀茂鶴の醸造所の点在する平和な山紫水明の農村に新設されたこの学校は、六ヶ月の間、齒科医士官の教育訓練を行い、戦局急迫に伴い、迫り来る本土決戦に備え、戦傷者の救急医療のできる医務要員として速成教育を行うことを主要な任務としていた。五十名を一分隊とし軍医少佐、大尉が分隊監事として訓育並びに専門教育に当たっていた。入校して待ちうけていたものは極限にまで達した精神的、肉体的の責め苦であった。

駆足は四キロから一六キロ、体操は休みなしの二時間から三時間、棒倒しは運動会のものとは比にならず、人の頭を踏み台とし、かけ登り血みどろの戦いで怪我人絶えず、男の力と力、肉体のぶつかり合いであった。銃剣術は三対一、待ちうける三人に向い突進、壮烈の気、場に充ち、失神して倒れる者あり。カッターはドラムカンをつなぎ二人で漕ぐ、艦内生活はチームワークが重要であり、その為競技は分隊対抗

が多く、負ければ股開き歯を食いしばれの号令一下、全力をこめたパンチのお見舞いである。中には脳震盪を起し倒れる者もあるが、馴れとは恐ろしいもので受身の要領も覚え、ご随意にどうぞと苦痛も感じなくなる。

このようなシゴキが続けられてゆく中、食糧不足であっても頑健な肉体と、戦時下の異常状況の下か、国の為には死すとも可なりと心境が培われてゆく。玉碎に際し軍医科士官はいかにすべきか、他科士官、下士官兵、死を急ぐを抑え、時をかせぎ少しでも敵に打撃を与えるよう冷静に努めるは、軍医科士官なり。重傷者は自決せしめ自ら一人最後に突撃するが軍医科士官なり。我々の背後には尊厳な歴史と美しい土地を愛する同朋の運命がかけられている事を思う時、我々が祖国を救わずして誰がこれをなし得よう。神機到来せんとしている。医務科の特攻隊となれ。あとひと月終戦が遅れていたならば九十九里か、九州の海岸線かこの体は波打ち際に横たわっていたであろう。

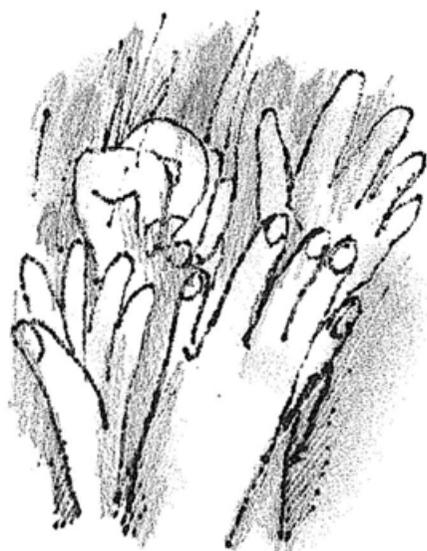
七月五日、呉市街空襲により全滅。午後五時過ぎ、私達の

分隊がバス、トラックに分乗派遣救護隊として呉病院に向う。翌日五時半起床、直ちに救護活動。市街全焼土と化し、凄惨たる様であった。山の中腹の比較的被害の少ない方山国民学校の講堂、教室に負傷者が並べられていた。ほとんど熱傷患者で女性が多く、モンペが燃えたのか、下半身大やけどの状態、残った皮膚は炭化し黒檀色を呈しウジが無数にわき、破れた皮膚から出たり入ったりうごめいていたが、患者は痛さに堪えかねうめき声を発する者、体を動かす事も出来ず、放心状態のうつろな顔つきで天井を見ているもの、様々であったが、消毒をほどこしリバノール肝油湿布と包帯交換をするのみであった。一日中走り回り、翌七日も救護に行ったが、昨日の戸板には別の人が寝かされていた。息を引きとったのか、戦争の悲惨をまざまざと見せつけられた。

八月六日、午前八時、各分隊は教室に入り講義をうけていた。突如、一瞬マグネシウム閃光のような光を感じ、しばらくして大音響とかなり強い空気震動を感じ、ドアは強く音をたてて開閉した。窓越しには広島市方向に巨大なキノコ雲が広がり、白から赤―黄―青紫と変化していった。六日正午過ぎ呉鎮守府長官より学校長あて出動命令があり、これには召集により入校した先任分隊の五十名が参加した。

戦後半世紀間近に來ている。青春を戦争で過した者は、そろそろ人生終末に近づいているけれど、今の豊かで平和な温室育ちの若い人に割り切れない気持がないとは言わぬが、どのような時代になっても国を愛する心と平和を愛する心は持

ち続けたい。過ちは二度とくり返すべきでない。また環境と教育のいかんによっては、人はいかようにも変わってゆく事も考えさせられる。核と人類は共存出来得るであろうか。万物を壊滅的破壊にもたらず核兵器の撲滅と永久平和を祈ってやまない。



◆血井 治（67歳）

## 終戦をむかえて―過去の責任、これからの責任を感じる

原爆体験 ●

昭和二十年八月、海軍少尉として、北陸の特攻基地に勤務していました。特攻隊員に任命され、死も時間の問題かと覚悟していました。しかし、昭和二十年八月十五日、終戦となりました。

広島・長崎におとされた原子爆弾は、物凄い威力を示しました。この爆弾こそ、世界で最初に使用されたいまわしい爆弾でした。

一瞬にして、広島・長崎市全土が焦土と化し、多数の人が生命を絶ちました。光を浴びた人々は、四十五年たつ今も、後遺症に悩み、倒れていつております。

軍人ばかりでなく、一般市民を巻添えにしたこの爆弾のことは、今では、世界の人々が関心をよせ、二度とこのような経験をさせてはならないと、叫び続けております。

終戦から十日たった二十五日に、故郷、九州の門司に復員する途中、広島を通過しました。その時見た、広島島の惨劇は、目をおおうばかりでした。共に復員していた友人が、広島で下車しました。

「貴様の家はあるのか」（軍隊では、仲間を貴様と呼んでいました）私の問いに、「ない」の一言。そして、茫然としてたちつくしていた姿は、今も、昨日のように、脳裏に刻まれ

ています。忘れることのない思い出です。原子爆弾が終戦のきっかけになったことは、まちがいないと思いますが……。

終戦まじかの日本は、極度の物資不足・手広く侵攻した日本軍の各地での敗戦・アッツ島、硫黄島在留軍の全滅・沖縄やサイパン島での民間人を含めた悲劇的な結末など、筆舌につくしがたいものがあります。

私は、戦闘機乗りとして、出撃のため訓練されておりました。しかし、もはや、乗る飛行機はなくて、これからの日本は、戦争は、どうなるのだと、不安の日々でした。

しかし、決定的な八月十五日を迎えました。神国を信じ、負けることはない、自負していた日本人の心は、打ちのめされました。

幸いに、私は、終戦で生を継続できるようになりました。でも、喜べませんでした。心の中になにか、過去の責任・これからの責任に、追いかけられているような感じでした。

心をいやし、二ヶ月後に上京し、教壇に立ちました。上京の際、あちら、こちらの都市が焼野原と化し、ひどい日本の姿を見ました。東京に着いて、その惨状は、さらにひどく、広々と、見渡す限りの焦土の姿でした。

敗戦の悲劇をいやという程、痛感しました。

それでも、山手線は走っていました。

どの駅からも、富士山がくつきりと、よく見えていたことを覚えています。新橋からも見えたのです。

山河は残ったのです。なんとか、復興させねばなりません。

基地で陛下の玉音を聞きました。

悲痛極りなく、涙がにじみました。

玉音を聞いて、ある特攻基地からは、死を覚悟しての出撃もあつたようです。また、今後を憂い、切腹やピストルでの自殺を敢行された方もいると聞いております。

しかし、こんな時でも、将来に思いをはせ、沈着な人もいるものです。

私達の前任将校がそうでした。

「日本の今後は、貴様ら若い者の双肩さうげんにかかっている。貴様らが日本復興にたちあがらずに、だれが、日本を復興さすのだ、頑張れよ」と、活をいれられたあの言葉は、今も忘れておりません。

新しい使命感を抱き、復員したあの頃を思い出します。私は教師の道を選んでおりました。よし、次代の子ども達を立派に育てるのだと、決意して、希望に燃えました。

それで、現在の復興した日本を見ると、感無量の気持ちもわくのです。

同時に、過去の色々なことが走馬燈のように、脳裡のうりに閃きらめくのです。

私自身、母一人子一人の立場でした。

母一人残して戦地に行くつらさ、しかも、特攻隊を志願せざるを得ない状況は、時の流れであつたのでしょうか。反面、夫を、兄弟を、父を、息子を、戦場に送る肉親のつらさは、

口では言えない、耐えられない感情があつたと思います。まして、戦死の報を受けたご家族の無念さは、いかほどだったでしょう。だまって堪えてきた、当時の、人々の心を思うにつけ、悲憤やるせない気持ちになります。

昭和二十年三月十日大空襲で、東京の町は阿鼻地獄あびじごくの日であつたと聞いております。

私は、土浦の航空基地にいましたが、遠く離れた土浦まで、東京の噴煙がなびいてきたのを思い出します。その時も多くの人が亡くなったのです。私の知人もいました。土浦基地も幾度か、敵機よりの銃撃や空襲を受けました。戦死した友人もいます。

私の身の回りだけでも、長崎の原爆で死んだ友人・特攻隊で死んだ友人・南方で死んだ従兄弟・北満で戦死した叔父……と、数多くいます。合掌、涙を禁じ得ません。

無念この上ないことです。この無念さにこたえるすべは、健全な青少年の育成しかない、念じつつ、現在までやってきました。

今の復興した日本。まだまだ、十分とは言えませんが、現状を報告することで、当時の犠牲者の方々の御霊にお詫びしたい、許しを乞いたい気持ちです。幸いに生を続ける者たちの務めでしょう。

二度と戦争を起こしてはなりません。

私は、お願いしたいのです。

若い方々、これから成長される青少年、少女の方々に、……  
「今後の日本が、世界でどんな責任を果さねばならないのか、過去の事実を念頭に、平和のために、努力して欲しい。」と。

◆藤原 四郎(63歳)

## 原爆投下二日後の広島を歩いて

原爆体験 ●

列車は広島に近付きつつあった。近づくほどにホウタイを巻き、薬品をにじませた痛々しい姿の人たちが元気なく乗りこんでくる。何か異常を感じているとき、「ああ、俺はもう本当に戦争がこわくなった……」と、全身全霊からしほり出すがごとき声があがった。答える者としてない。そんな声が憲兵や警察の耳にでも入るとただではすまない時代であることを、その人自身がよく心得ているはずであるのに……。

広島の手前で下車する人も多く四人の席に私一人となった。そこへあわただしく乗りこんで来た三人が掛けるや否や、目も釣りあげ興奮した声で編集の打合せを始めた。何と、新聞記者ではないか……。いよいよ私は異常の感を深くせざるを得なかった。

列車はしばらく広島駅で運転を打ち切られ、二駅先まで歩かねば先への連絡はないという。ホームに程遠い駅構内に停車。皆がバラバラと飛びおりた。改札とてない。あるのは見渡す限りの焼け野原であった。神戸、大阪の空襲を体験してきた私も、広島完全焼失には目を見張らざるを得なかつ

た。先方から兵隊がモッコをかついでやって来た。電柱の黒こげと思つたそれはすれ違った瞬間、性別さえ不明の人間の黒焼き、木炭と化した死屍と知つた。焼けただれた皮膚がロボロボはがれ落ちそうである。道路には水道管よりあふれた水が勢いよく小波を立てるが如く流れ、真夏の太陽にキラキラ輝く。一瞬そこに平和を感じ美しさにしばし見とれた。「お飲みなさい」とばかりそばに茶わんもある。炎天下、地獄に仏にあう思いで飲んだが、その水は、その先で沢山の死者たちの中を流れてきた水であったことを知るに及んだ。

焼けただれた市電の席に掛けている人がいる。しかし、よく見ると掛けたまま死んだ人であった。

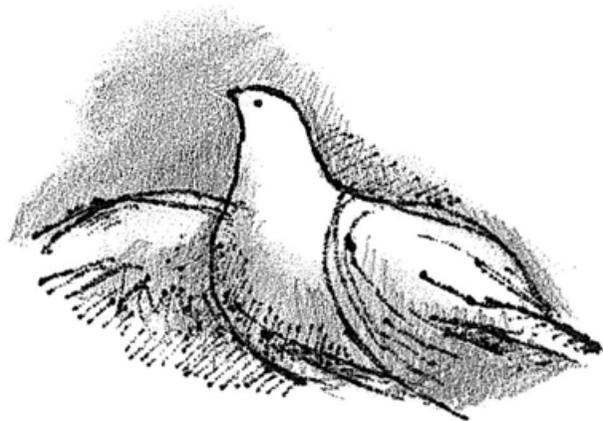
行く人の波間をただよつた私は己斐駅前にとどり着いた。散乱する死屍につまずかないよう下を見て歩いて来た私は、ようやくの思いで目を上げた彼方に、緑が飛びこんで来た。暗黒より甦る明るさに私自身が生き返つた心地であった。そこへ、一陣の風が吹き渡ってきたが……涼風ではなかった。何とも言えないなまぐさい風であった。たくさん不幸な死

者たちを吹き抜けてきた風であった。

「父ちゃん。もう悪いことせん。悪いことせんから、こらえて、こらえて……と泣き叫んで、子供は死んでゆきました……」と、狂気のごとく訴え続ける父親がいた。しかししばらくみなが自身ぼんごが呆然としており、うつろであった。その父親を顧る者としてない。共に被爆せる父親もまた子供の後を追うように悲しみの中へ己が生命も失っていったであろう……。

数時間の広島市内の歩行に私もまた放射能の影響を受ける身となっていた。足に出来た数ヶ所のおできは一センチもの深さに達し、治療に数ヶ月を要し、傷あとは一ケ年を経てもあざやかに残り、酒でも若干入るとどういいうわけか傷あとも赤く染まった。根気も気力も私から減退。ゴロリと横たわれる青春の一時期さえあった。しかしながら十代の若さと、広島に留った時間の短かさと、その後の処置のよろしきを得て順次、快方に向った。

以来、四十五年。六十三歳に達した現代の私は、異常なる足の冷えを感じ、寄せる老化的波と共にその日の影響もまたよみがえってくる趣である。





# ■ 戦争当時のこと

## 回想

戦争当時のこと ●

### 昭和十六年四月浙東作戦

初陣のわれ一升の酒飲みつ語り明かせり三月事件  
敵前に上陸終へし兵進む映画のシーン観るためらひを  
前線の兵は伝へり中国兵の弁慶の最後かくやその死を

### 大東亜戦争前夜

上海の霜夜の町よ去りがたし三木清の「哲学入門」を購ふ  
南方の作戦ならむ蚊帳ありぬ明日のことなど煩ひもせじ  
乗船前夜「將軍と参謀と兵」の映画観て帰營せしあととビン  
夕喰へり

### 西部ニューギニア

岩壁に横づけされし輸送船いく潮騒みに船体錆びて  
みんなみの遠き小島に夢を見しわが病む額に母の掌ありぬ  
犬のごと小豚いとしむ兵も居きアラフラ海の島なつかしも

### 昭和二十年八月十五日敗戦

生きんとて今日も野面を耕せば乾きし土にこもる熱風  
軍書あり兵こそ国の大事とぞわがこころ病み海を恋ひける  
熟れずして朽ちし木の実にさも似たり乗船の日定まりてみま  
かりし君は

短歌「回想」は沼津市下香貫善大夫三二三五電話〇五五九一  
三一四〇三五の朝風の会の「朝風Ⅱわれら戦争を忘れまいⅡ」に投稿  
した作品を再録いたしました。



◆遠藤 平雄（51歳）  
敗戦のコラーージュ

戦争当時のこと

一面焼け野原だった敗戦の焦土は  
僕らの格好の遊び場だった。

光熱で溶解されたビー玉の塊が

まだ透明だった真夏の太陽の光に美しく輝き、

僕の想像力と好奇心をそゝる無数のオブジェが散乱していた。

それは玩具のない時代の夢の玩具であった。

毎日がひもじかったあの時代に

それでも敗戦の焦土には

ディズニールランドではけして体験することができないであろう

子供たちを魅了する夢幻な世界が広がっていた。

終戦の年、僕は国民小学校一年生。

まるで読むところのない真っ黒に塗り潰された教科書を

茫然と見つめていた。

七つの子供のところに映った敗戦国日本の心象風景は

荒野のように見渡す限り広がる焼け跡と

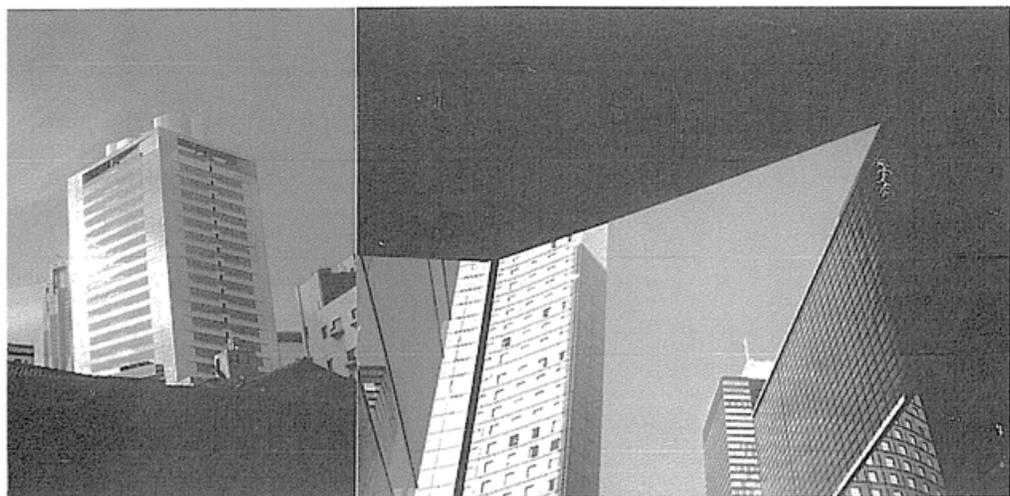
おとぎの国から来たような陽気なG・Iたち、

神様のように桜田通りを凱旋していった

ダグラス・マッカーサーの誇り高い横顔である。

鮮やかな星条旗と光り輝くキャデラック

怪物のようなスチュードベーカー



僕の脳裏に焼きつけられたラッキーストライク  
空き箱を拾っては銀紙に漂うアメリカの香りを吸い込んだものだ。

子供たちは叫んだ「ギブミーチョコレート！」  
真っ先に覚えた英語であった。

腹べこと引き換えにやってきた戦後民主主義  
昨日まで教育勅語を大声で読まされていた僕たちは  
校庭で女生徒と手を組まされてフォークダンスを踊らされた時の  
なんとも言い様のない恥ずかしさは  
今でも思い出すたびに苦笑します。

とうにあの世に逝った銀座泰明小学校第一回生の祖父が  
経済復興の記念碑のようにそびえ立つあの東京タワーの下で丹精に耕した  
トウモロコシ畑と麦畑はどこへ消えてしまったのだろうか  
僕たちにとって夢の大地であったあの焼け跡は  
乱立する眩いビルの風景のなかで蜃気楼のように見え隠れしている。  
ギラギラと輝いていたあの夏の光はおよそ半世紀の時の流れに  
センチメンタルな僕の心のなかで風化していくばかりだ。

いま若者たちは歌う

「24時間戦えますか、ジャパニーズビジネスマン！」

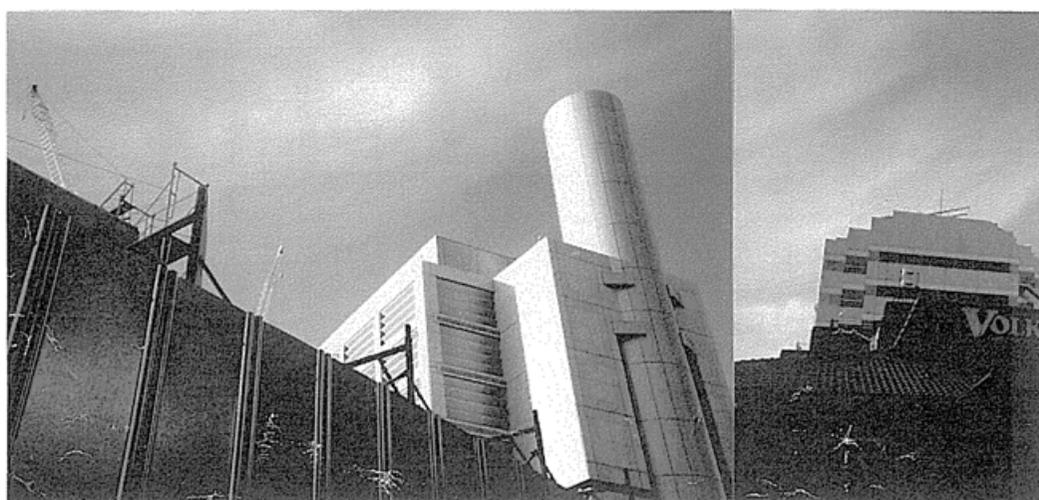
かつて僕たちが遊んだ焼け跡の上で  
ビルの谷間で若者たちが歌っている。

あの光り輝くビー玉の幻影の中で

若き企業戦士たちが歌っている。

一九九〇年の夏は幸せなのであろうか……

僕を抱きしめガダルカナルへ行ってしまった当時二十歳だったソデちゃん  
天国で何をしているのでしょうか。



◆大村 敬一（71歳）  
敗戦四十五周年記

戦争当時のこと ●

沖繩摩文仁の丘より

見はるかす大海原の果てるところ

古戦場ニューギニア島

独り静かに臉をとじれば

密林の白骨街道の記憶が蘇る

蹲ったまま息たえた者

うつろな眼でかすかに呼吸している者

生きているのか死んでいるのか

何人も銃を持たず

木の杖をもち

衣服はボロボロ

ふくれた足を投げ出し

どこの部隊か階級も分らない

米軍の猛攻をささえかね

第一線陣地から後方陣地に退却する

兵力の損耗甚だしく

生と死との境を遅々と歩む

死屍はたちまち白骨となり

白骨は数を増し長い列をつくる

栄養失調とマラリヤは最大の敵

次々と生命を奪ってゆく

地獄と呼ぶべきか

悲惨、惨の極

鸚鵡の怪奇な鳴き声が

死の使者のようだ

将兵は死のきわに

心を故郷に馳せ

父母姉妹と語りあい

永い眠りにつく

太平洋の諸々の島に

無意味にばらまかれた日本軍  
大東亜建設なる不可解な理念の犠牲に  
幾百万の戦士の生命が散った  
そは誰が望みしものなりや

四十五年の歳月をちぢめて

われ暫し地上に横たわる

戦友の若き日のままの丸い顔が

語りかけ そして消えてゆく

記憶の中に明滅する

南十字星の淡い光はお燈明か

われにかえり頭をあげれば

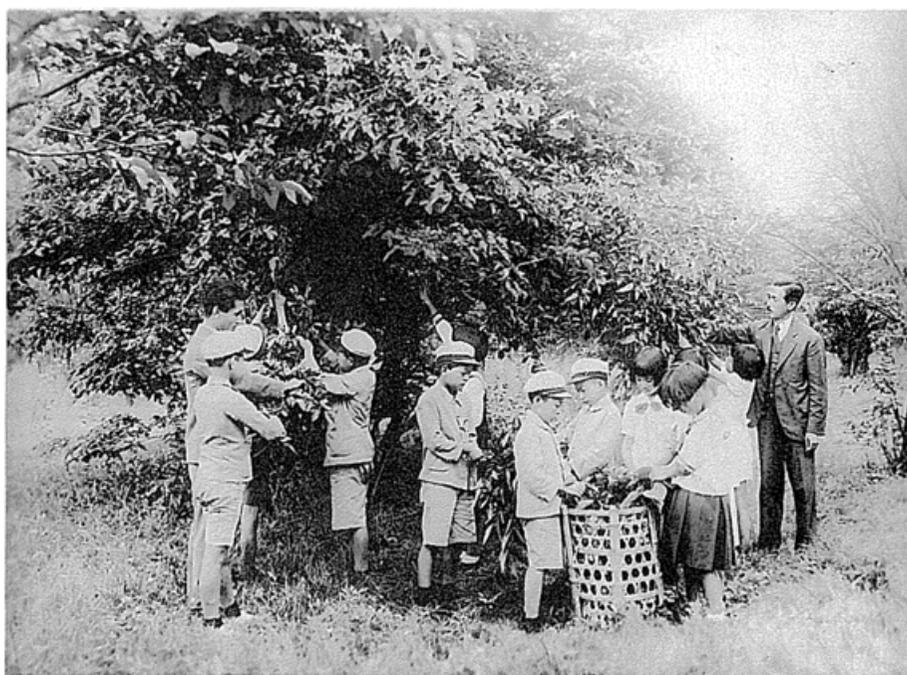
海は永却の波動をくりかえし

天空の白雲は悠然と動いている

目路遠きあたりから基地の爆音がし

明日の運命は不透明だ

にわかに深い哀しみがわいてきた



桑つみ

(港区教育史資料)

◆岸田 芳郎（81歳）

## 丁子は今どこに

戦争当時のこと ●

私は昭和十三年春から二十年間、神明小学校の教師として働いてきたが、その間、私の心に忘れ得ぬ光と影をきざみつけて行った子どもたちの中の一人に丁子がある。

私が丁子のクラス担任となったのは昭和三十年四月の事である。その前の年、私が六年生の担任であった時、一年生担任のH先生に職員室にまでまつわりついていた丁子をよく見かけたことがあった。

四月になって二年一組の担任となった時、丁子がその中にいたのである。新学期の給食が始まると、さっそく丁子が問題を起したのである。その日の給食に出たりんご数人分をそつと自分の机の中にかくして皆を困らせたのである。そのことを手はじめに次々とクラスの中に波風をたてた。

一例を挙げれば、図工の時、自分の新しいクレパスは机の中にしまっておいて、となりの子のクレパスを借りようとしてたりするのである。私もこれには困りはてて家庭訪問をしてみることにした。

丁子の家は大工をしている伯父と丁子の二人ぐらしであっ

た。伯父は丁子がまだ寝ている内に仕事にでかけることが多かった。もちろん丁子が困らぬようにお金はいつも渡していたのであるが。夕方仕事都合で帰りのおそくなることも度々で、丁子は家では一人ぼっちの事が多かったのである。丁子には家庭のあたたかみのある生活がなかったので、その不満のはけ口を教室に持ちこんで発散させようとしていたのである。

伯父の話によると、丁子の父親は戦時中に徴用で樺太に妻子を残して東京の工場に出てきたのであった。東京に出てから、カフェーの女給をしていた丁子の母親と知りあい、同棲していたが、昭和二十年八月十五日終戦となった時、樺太に残してきた妻子はどうなったものか、その消息をつかむことができなかった。そこで父親は丁子の母親と同棲をつづけて、丁子が昭和二十四年に生まれたのである。

ところが、しばらくして樺太に残してきた妻子が無事札幌に引きあげていたことがわかると、父親は丁子とその母を残して北海道へ行ってしまった。困った丁子をつれた母親は大

工の妻となっている姉のところへ身を寄せたのである。しかし、不幸は重なるもので、丁子の母親も姉もつづいて結核にかかって死亡してしまったので、伯父と丁子が残されたのであった。

伯父は仕事のある日は、まだ丁子の寝ている内にでかけてしまうことが多いので、丁子はひとり朝食をすませて登校することが多かった。こずかいが困らぬようにと持たせてはあったが、学校がすんで家にもどっても、伯父が仕事から帰ってくるまでは一人ですすしかなかった。その欲求不満のはけ口を学校生活の中に求めていたのである。私は丁子の扱いは、ほとほと手をやいた末、机を私の机のそばにおき、何かにつけて声をかけてやることにした。

その後も、折にふれて問題を起しては私を困らせていたが、翌四月、三年生になった時私は鞆絵小学校に転任することになり、丁子との縁は切れてしまったのである。学校をかわっても、どうしただろうと気にはなっていたが、数年後、区立中学に進学してから友だちの家に遊びに行き、多額の金を盗み出したりして、少年鑑別所に入ったという話をきいた。

それからまた数年後、私が友人と桜田小学校の研究会のあと、友人と近くの喫茶店に入った時、偶然、店の片隅のうす暗い席で男友だちと話している丁子を見つけた。私が「丁子ちゃんじゃない。」と声をかけると、まだ小学校時代の幼な顔の残るはにかみ笑いをしてみせたが、その後丁子の

消息は杳としてわからない。

今、彼女はどこで何をしているのだろうか。

公私立を通して五十年近い教師生活の中で私の心に忘れ得ぬ光と影を残した子どもたちは数多くいるが、新橋の喫茶店ではにかみ笑いをみせたきりで消えた丁子のことは、私の心から長く消え去ることはないであろう。



集の東が、戦友会の案内状が、旅する日々の近影が、各種の資料が、次々と。

永の執念遂にぞ実る！

※ ※

「安達さん！ あんたが島根の人だったとは——、名だたる俳人だったとは——、私より三歳兄貴だったとは——。」

「農家の二男坊で、気楽な身分で（いや、実質は違ったかも知れないけど）、わりと早目に復員・帰郷できたらしくて、良かった〜。あのとき、どこで、どんな様子で、どんな風に別れたんだっけねエ。私なんか全然おぼえていやしない——」

「安達さん！ あんたは能く覚えてるンでしょう。武装解除に次いで即時解散ということになって、一路釜山の港へ向ったんじゃないですか？ それから乗船して順調にくに、元へ帰られたんでしょう？」

（それなのに、私に言わせれば、何も彼もありやしないんだ。ただ安達明秋——、すっからかんの頭の中に、あなたのにぎやか一杯の笑顔と名前とだけを、たった一つ、妙なもので固くこびりつかせただけで、ほかの物はなんにも受けつけなくて、根こそぎという感じ——持つて行かれた先がシベリヤの曠野。いまとなってみれば、なに足掛わずか四年有余の短日月にしか過ぎぬではないか、といえもしようが、故なく戦後自由を奪われの身に、実質二年半ばを超えた歳月の重みは、測り知れなく甚大なものとせねばなるまい）

※ ※

ふたりの逢う日、それはいつ？ 必ず来るに違いない。その日、二人は——、

「安達さん！」

「土屋君」

あとは、恐らく言葉は出まい。

いや、言葉なんか、いらなはずだ。その日のために、いのちの炎を絶やさなければ、それでいい。

生来、身内の縁しに極めて薄い私に、これがあるいは終生の老友となるかも知れぬ。

（たしかな予感がする）

終りに、これぞ主役というべき二句を、わすれるわけにはいくまい。

昭和二十年八月十五日を詠う

天地も人も放心汗もなく 安達波外

百日紅終日思ひ定まらず 土屋年男

（昭和万葉俳句集より）

## 港区戦争体験記録集 用語解説

- 慰問袋 出征兵士を慰めるため、地域の婦人会や学校単位で中に日用品や菓子、娯楽品、励ましの手紙などを入れて送った。
- M. A. (Military Police) 米軍の警察、憲兵のこと。
- 学徒出陣 戦局の激化により、主に文科系の大学・高専生徒の徴兵猶予が停止されて戦地に送られた。「神風特攻隊」員として命を落とした学生も多かった。
- 学徒動員 学生、生徒を対象に行われた勤労働員のこと。昭和十九年の学徒勤労法によって始められた。軍需工場などへ動員された。
- 学童疎開（緑故疎開・集団疎開） 戦争末期、都市の国民学校の生徒を空襲の危険から避けるために強制的に農村部へ移動させたこと。東京からは約二十万人が疎開した。しかし疎開先の食糧事情は悪く、栄養失調やシラミに悩まされた。他に親戚などを頼った緑故疎開と学校ぐるみの集団疎開とがある。
- 教育勅語 明治二十三年に天皇から国民にむけて発布された「教育ニ関スル勅語」のこと。国民の守るべき道徳、基本精神として忠君愛国の精神を中心に説いたもの。終戦に到るまで、学校教育の支柱として子どもたちに教えられた。
- 玉音放送 「終戦の詔勅」といわれる天皇自らの声による放送のこと。昭和二十年八月十五日正午から重大ニュースとして、ラジオを通して国民に伝えられた。
- 勤労働員 戦地に働き手となる男子が送られたため、労働力が不足した農村や工場に十四歳以上の男女が勤労働奉仕する義務が昭和十六年に法制化された。強制的な無償労働で、隣組や学校などを通して提供させられた。
- 空襲警報 敵機の来襲が確実となったときに鳴らすサイレン。戦争末期、爆撃が激しくなると、空襲と、警報がなるのとが同時のことも多かった。
- 軍属 正規軍人ではないが、軍人に準じて戦争遂行のためのさまざまな任務にあたった人の総称
- 警戒警報 敵機の来襲は確実であるがどこを攻撃するかはまだわからないとき、進行方向の地域で鳴らしたサイレン。
- 高射砲 航空機を射撃するための大砲で空中で弾丸が炸裂する。高高度を飛ぶB 29に対しては弾が届かなかった。
- 五、一五事件・二、二六事件 第一次大戦後の経済恐慌を打破するため、大陸侵略と軍国主義化を目指した青年将校らが首相官邸、日銀、警視庁などを襲撃し政府打倒をねらった事件。昭和七年五月十五日と、昭和十一年二月二十六日におこった。
- 国賊 戦争や国家に対して批判した人をこう呼んで非難した。また非国民とも言った。
- 焼夷弾 燃えやすい焼夷剤（重油、揮発油など）を入れた爆弾。東京大空襲の際にも多用された。焼夷剤の種類によって油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾などがある。
- 照明弾 夜間の攻撃、飛行機の離着陸、偵察のために、地上の間を数秒ないし数分にわたって照らす砲弾。
- 召集令状（赤紙） 兵隊を召集するための令状のこと。この紙一枚で国民は兵役に応じなければならなかった。令状の色が赤だったので一般に赤紙とも言われていた。
- 進駐軍 占領軍のこと。旧指導者は敗戦の衝撃を少しでもやわらげるため、占領軍といわず、進駐軍といった。
- すいとん 小麦粉を水でこね、汁で煮込んだ食べ物。戦争中食べ物不足し、その応急策として主食の代用として食べるようになった。
- 千人針 戦場での無事を願って、木綿の布に赤い糸で千の結び玉をつくって弾よけのおまじないにしたもの。慰問袋とともに出征兵士に贈った。

○微用 戦時中、国民を軍需工場などに強制的に動員し、働かせたこと。

○挺身隊 女子勤労挺身隊のこと。戦局悪化による労働力不足を補うために、男子にかわって、十四歳以上二十五歳までの未婚の女子も軍需工場などで働いた。

○DDT 進駐軍が戦争で混乱した日本の衛生状態改善のために散布した薬品。当時、身体についたシラミなどを退治するために、頭から白いDDTの粉末をかけられた人も多かった。

○燈火管制 夜間の敵機の襲来に備えて爆撃を避けるため、各家庭では、窓や電燈をおおって、戸外に光がもれないようにした。

○隣組 昭和十五年、国民を統制するため従来の町内会活動を基盤に十軒くらいを一単位としてつくられた地域組織。戦争遂行のためのさまざまな指示事項の伝達、互助、自警、配給などにあたった。昭和二十二年に廃止された。

○日支事変（日中戦争） 昭和十二年の満州事変から日本の敗戦まで行われた、日本と中国の戦争。当時の日本では中国を支那とよんでいた。

○B 29 米軍の大型戦略爆撃機で当時、最大の長距離爆撃機。広島、長崎に原子爆弾を投下した爆撃機。

○D X (Post-exchange) 終戦後、進駐軍の兵隊とその家族のために設けられた買い物施設。酒類の他に、衣料、食糧、日用雑貨などがおかれていた。

○防空壕 空襲の被害をさけるための穴や地下室。各家庭が庭などを利用してつくり、空襲警報がなると避難した。しかし必ずしも安全だったわけではなく、直撃の不安をかかえてじっとしているしかなかった。

○満州事変 領土拡張をねらう日本軍が満州鉄道を爆破した柳条溝事件に始まる満州への侵略戦争。日本は翌年満州を独立させた。昭和十二年には宣戦布告をしないまま全面的な日中戦争へ突入し、昭和十六年、太平洋戦争へと拡大した。

○満鉄 南満州鉄道株式会社の略称。明治三十九年創設され満州で鉄道

経営を主として、植民地経済の基盤を担った大企業。

○ヤミ市 配給制などによる物資の統制により食糧や日用品が極度に不足したため正規の配給ルートを通さず手にいれた品物を売る店が多くの人に利用された。敗戦と同時に都市の駅前などで始まった。東京では上野や新宿、新橋などに大きなヤミ市があった。

○榴弾砲 爆風、破壊および破片効果を与えるために使用された。大量の炸薬を充填してある弾丸をつめた砲弾。

## 編集後記

港区の平和事業として、区民のみなさんが幅ひろく参加でき、永く残していけるものは何かと、企画にとりかかったのは平成元年九月のことでした。各方面からいろいろな意見を聴いたり、他の自治体の状況も調査しました。

東京は、第二次世界大戦の空襲によって多くの家屋が焼失し、子供たちのほとんどが学童疎開をしました。戦災の状況は各区さまざまであり、また区民のみなさんの体験もそれぞれ異なるものがあります。このようなことから港区としての戦争体験を残していく必要があると考えました。

原稿の募集は平成二年四月から八月までとし、区の広報紙やポスター、チラシにより行いました。締め切りまでに予定した数の原稿が集まるかどうか心配でしたが、最終的には百四人の方から百二十編も寄せられました。お寄せいただいた体験記はみな当時の思いが凝縮されており、できるかぎりそのままのかたちで、全員の方について掲載することにしました。しかし、紙面の都合等により部分的に割愛させていただいたものもあり、おわび申し上げます。

編集にあたっては、明治学院大学社会学部松島浄教授、同橋本敏雄教授、同学大学院生長村章子氏、港区手をつなぐ親の会会長飯田キエ子氏にご協力をいただき、関係資料の収集等で働きようせいに大変お世話になりました。また港区立南山小学校元教諭の故恩田孝徳氏が描かれた終戦当時の港区の戦災絵画の使用（掲載）については、ご長男寛氏にころよく承諾していただきました。ここに本書を発刊することができましたのは、各位のご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

この「港区戦争・戦災体験集」の作成のさなかに、平和を願う世界の人々の意志に反して、平成三年一月十七日に中東湾岸戦争が勃発しました。大変残念なことです。

私たちはこれからもなお一層平和の実現のため努力していかなくてはなりません。

平成三年三月

平和への願いを込めて

—— 今語りつぐ戦争の体験 ——

平成 三年三月二十五日発行  
平成 三年六月 二十日二刷  
平成 七年三月三十一日三刷  
平成十六年三月三十一日四刷  
平成十七年三月三十一日五刷

編集 港区戦争・戦災体験集編集委員会

(委員長 明治学院大学教授 松島浄)

発行 港区政策経営部人権・男女平等参画担当

〒105 東京都港区芝公園一―五―二五  
電話〇三(三三七八)二二―一内線二〇二五―二〇二七

発行番号

16137  
―  
1511



区の木/ハナミズキ



区の花/アジサイ



区の花/バラ